

2021 年 6 月 27 日（日）「委ねつつ備えよ」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 10:8-11

《新改訳 2017》伝道者の書 10:8-11

- 8 穴を掘る者はそこに落ち、石垣を崩す者は蛇にかまれる。
- 9 石を切り出す者は石で傷つき、木を割る者は木でけがをする。
- 10 斧がなまったら、その刃を研いでおかなければ、力が要る。知恵には益があり、成功をもたらす。
- 11 もし呪文を唱える前に蛇がかみつけば、蛇使いに益はない。

- 8 穴を掘る者は自らそこに落ち、石垣を崩す者は蛇にかまれる。
- 9 石を切り出す者は石で傷つき、木を割る者は木で危険にさらされる。
- 10 斧が鈍くなったときは、刃を研がないならば、もっと力がある。しかし、知恵は人を成功させるのに益になる。
- 11 もし蛇がまじないにかからず、かみつくなれば、それは蛇使いに何の益にもならない。

【序論】

今日は「保険」という事柄を考えつつ、御言葉に取り組んでいきたいと思います。私たちの生活の中で身近となった保険。運転する人ならほとんど誰でも加入しているのは自動車任意保険でしょう。また、火災保険、地震保険、生命保険、医療保険、がん保険、養老保険、介護保険、学資保険などもよく耳にします。私もいくつかの保険を試してみた時期があり、「歯の保険」という新型保険に加入してみてそこそ役に立ったこともありました。「保険」という言葉を国語辞典で調べてみると、次のように説明されています。

「偶然的に発生する事柄（保険事故）によって生じる経済上の不安に対処するため、あらかじめ多数の者が金額を出^{しゅつえん}捐し、そこから事故に遭遇した者に金銭を支払う制度。」

「失敗したときの保証となるものを比喩的にいう。」

人生何が起こるか分からないものですから、「何かが起きたとき」のことを想定してあらかじめ金銭的備えをする人間の知恵と言えましょう。動植物はそのような「先読み」はしませんが、本能的に食料の確保や頑丈な巣作りということはしています。人間と動植物の大きな違いというのは、その行動の動機に「不安」があるかどうかではないでしょうか。人間には将来を予測する能力がある程度備わっているがゆえに「もしもこうなったら」という「不安」が伴います。そして、その不安に対処するために備えるのです。

メッセージの冒頭でどうしてこのようなことを語ったかといいますと、今日の箇所は特に職業上の事故（いわゆる労災）との関わりが強いからです。

【本論】

説教の内容を理解しやすくするために、テキストの構造を把握しておきましょう。

- ① 仕事中に起きる予期せぬ事故〔4つの例〕（8～9節）
- ② 準備は事故のリスクを下げる（10節）
- ③ それでも事故は起こりうる（11節）

この箇所を学び始めたとき、その内容があまりに日常的であり、宗教的な要素なしの格言としても読めてしまうので、そこから聖書の真理を掴み取ることができるだろうかと逆に不安になりました。しかし、学んでみてこの箇所の面白さに気づかされ、また本書全体の文脈に位置づけて読むことができるようになりました。

本論 1. 仕事中に起きる予期せぬ事故〔4つの例〕（8～9節）

8～9節では、人が仕事中に被る可能性のある事故が4つ挙げられています。多くの注解書では、例えば詩篇 7:16 に絡めて、「報い」の思想が語られていると強調されています。つまり、悪い目的で事を行なうと、ブーメランとなって返ってくるという考えです。しかしながら、この二つの節を注意深く読むと、「悪しき目的」については何も語られておらず、単に仕事中に起きてくる事故について言われているにすぎないことが分かるでしょう。

(1) 穴を掘る者はそこに落ち

「穴を掘る」目的はよく分かりませんが、家を建てるために柱を立てるための穴などがイメージできそうです。あるいは、何かを埋めるための穴か。必ずしも、誰かを落とすための穴とか、比喩的に他人を陥れようとする事などと捉える必要はありません。いずれにせよ、穴掘りの仕事をしていたら自分が掘った穴に足を取られてしまうということはよくある話です。

(2) 石垣を崩す者は蛇にかまれる

「石垣を崩す」という行為も、泥棒に押し入るということでは特になく、危険を伴う仕事の一つとして挙げられているにすぎないでしょう。当時のパレスチナの石垣というのは、石を積んで透き間に泥を詰めて造られたそうです。その泥が崩れ落ちてできるく

ぼみなどに蛇が巣を作ることもあったようで、作業中に蛇が出てきて噛みついてくるような状況でしょう。以前、石神井川の河川工事の最中に、作業をしていた人がスズメバチに刺されて救急車で運ばれた気の毒な事故がありました。地形的に巣が作りやすくなっていたようです。このように、労働には思わぬ事故が伴う可能性があります。

(3) 石を切り出す者は石で傷つき

ここでは石切職人の作業について語られています。香川県の妻の実家の近くにも鉾山があり、そこから石が切り取られて運ばれている様子を見ることがあります。山の麓には石屋さんがいくつもあり、墓石などが多く作られています。その山を遠目に見つめると、過去に何度も事故が起きたのではないかと想像するものです。石を切り出す作業によって手を切るとか、破片で失明するとか、粉塵を吸い込んでしまうとか、いろいろなリスクを伴う仕事です。

(4) 木を割る者は木でけがをする

薪を作るために斧で木を割る作業も、慣れていないと危険です。また、木こりが大木を切り倒す際にも、木が予想とは違った方向に倒れてきたり、破片で怪我をしたり、聖書の中には斧の頭が吹っ飛んで誰かに大怪我を負わせてしまうような事故まで書かれています。いずれにせよ、これらの労働には常に事故が伴う危険性があるということが言われている。

上記のような肉体労働は特に怪我の心配がありますが、どのような職業であれ何らかのリスクを負っているということを忘れてはならないでしょう。弁護士がクライアントから逆恨みされるということもあれば、投資家が株価の暴落によって大損をするということもあり、教師の立場にある人が心を病むこともあります。牧会においては、守秘義務の部分で悩むことが多いです。すべての人生には、その人生固有の「危険」があると言えるでしょう。

ここで一つ読み取れる聖書の真理として、「この世」は多くの危険が待ち構えている地であることを忘れてはならないという教訓が聞こえてきます。霊的生活においても、ちょっとした心の隙を悪魔に突かれ、罪によって神様との関係が悪くなることがあります。

身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうと歩き回っています。(Ⅰペテロ 5:8)

本論 2. 準備は事故のリスクを下げる (10 節)

以上の内容を受け、10 節では事故のリスクを低くするための知恵が教えられています。

斧がなまったら、その刃を研いでおかなければ、力が要る。知恵には益があり、成功をもたらす。(10:10)

ここで語られている真理は至って単純です。斧の刃の手入れを怠っていると、木を切る際に切れ味が悪くて、必要以上の労力を要することになるということです。また、力任せに木を打つため、手を痛める可能性もあり、事故にも遭いやすくなる。私にも似たような経験がたくさんあります。木工作業中に、ちょっと手袋を取りに行けばよいものを、素手で作業し続けていたら、棘は刺さるし、手は荒れるし、刃物で怪我をするし……。後で後悔することが多いものです。

神学生時代に牧会学のクラスで学んだ事柄も思い起こされます。教会形成には、大きく分けて三種類の問題処理事項があるということを学びました。

第一に、差し迫った状況に対処しなくてはならない問題です。特に、問題を抱えて相談に来られた信徒さんのお話を伺い、その問題と一緒に取り組まなくてはならないような状況です。あるいは、信徒さんが召されて、早急に葬儀に当たらなければならないこともあります。このような待ったなしの状況のときには、他のものはすべて脇に置いてすぐさま取り組まなくてはなりません。しかし、これらについても、日頃から何が起きても向き合える心の準備が必要です。

第二に、中期的に見て備えていくべき課題というものがあります。それは、目の前の問題処理ばかりに追われるものではなく、例えば教会の教理の一致を目指してジワジワと学びを続けていくことや、地道な講解説教による聖書の読み方の呈示なども含まれてくるでしょう。あるいは、自分自身の学びの時間を常に確保し続けることなども重要です。

第三に、長期的に見て備えていくべき問題もあります。それは、自分がやがて引退する身であることを常にわきまえ、将来の後継者のために祈っていくことや、子どもたちの信仰教育、団体や各個教会の将来を見据えた方向性を考えていくようなことです。

牧会を例に挙げてお話しさせていただきましたが、何事も準備なしに生きていますと、いざ問題が浮上してきたときに右往左往することになります。10 節で言われているように、「斧を研いでおく」必要があるのです。それは自分の身を守るための知恵であり、何事においても共通する真理と言えるでしょう。

本論 3. それでも事故は起こりうる (11 節)

しかしながら、準備を滞りなく行なっていたとしても、問題がなくなるわけではありません。

もし呪文を唱える前に蛇がかみつけば、蛇使いに益はない。(10:11)

今日の箇所では、面白いことに「蛇」が二度も登場します。蛇というのは、基本的に悪いイメージが持たれている生き物ではないでしょうか。その見た目の醜さや動きの気味悪さ、時に毒をもって害を加える存在であることが、人に嫌悪感を抱かせるのでしょう。

本節では「蛇使い」という特殊な職業が取り上げられています。現代にもコブラを手なずけて操る人々がいるようですが、古代においても珍しい存在ではありませんでした。

「蛇使い」を直訳すると「舌の主人」となるのですが、言葉で蛇を操ることの表現かもしれません。勉強のために YouTube で蛇使いの実際の映像を見てみましたが、アラブ人の方が複数の毒ヘビを自在に操り、顔と顔をくっつけたり、一緒に踊って見せたり、最後は眠らせてしまったり、信じられないような芸当を繰り広げていました。蛇の心を知り尽くしているのでしょう。とはいえ、この仕事には危険が伴い、一步間違えれば噛まれて死んでしまいます。この芸当を人に見せられるようになるまでには、想像を絶する訓練が必要と思われますが、その準備そのものが「保険」と言ってもよいかもしれません。しかし、どんなに訓練された人であっても失敗は起こりえます。

似た職業として、ワニ使いというものもありますが、日頃自在にワニを操っていた人が、見物人が立てた大きな物音によってワニが驚いてしまい、事故につながってしまったという事例もあるようです。

コヘレトが今日の箇所で読者に伝えようとしているのは、「知恵の限界」です。どんなに知恵をもって臨んだとしても、現場ではその知恵が通用しないことがあるということを言おうとしている。どのような仕事であっても、教科書には載っていないようなことが起きてくるでしょう。その都度、私たちの中の固定観念を取り払い、新たに生じてきた問題に対処するための勉強を始めなくてはなりません。知恵が備わっていること、準備をしておくことは重要ですが、それさえも絶対視することはできないのです。

あらゆる保険に加入していたとしても、最終的に私たちの命は取り去られる日が来ます。地上の保険に入っていたからといって、永遠のいのちが保証されるということはありません。人のいのち、また永遠に関わることの決定権は神にあるということを私たちは忘れてはならないのです。ある金持ちを例に主イエスが語られた譬話より。

しかし、神はその人に言われた。『愚かな者よ、今夜、お前の魂は取り上げられる。お前が用意したものは、一体誰のものになるのか。』(ルカ 12:20)

【結論】

では、私たちはどう生きればよいのでしょうか。それは、二つの真理をしっかりと握って生きるということです。第一に、神の主権を認めるということ。自分のいのちの権限は神にあり、自分には最終的な操作ができないということを常に銘記するということです。だから、私たちは神に委ねて生きる必要がある。しかし、私たちはこの方が根源的に良いお方であるということを知っていますから、この方との契約関係のうちに安心して歩んでいけばよいのです。第二に、神に人生を委ねつつ、地上で起きてくる諸問題に備えて生きている必要があるということです。不要な怪我や事故を避けるため、準備によって自分を守っていけるところには最大限の労力を費やすことが重要でしょう。生きる上での「手抜き」をせず、何事にも一手間かけて臨んでいく姿勢が求められているのではないのでしょうか。その上で起きてくる事故は、神の御手の中にあると、また委ねることができるのです。

【祈り】

人生の主権者なる神よ。私たちの地上の歩みには多くの危険が伴い、不注意や怠慢によって引き起こすものも少なくありません。注意深くありたいと願いながら、失敗してみても初めて自分の甘さに気づかされることもあります。願わくは、様々な状況に対処するための知恵と力を与えてください。そして、その上で尚、最終的な人生の統治者、導き手はあなたであることを覚え、信頼をもって委ねていくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

良い事も悪い事も含め、人生を、そして歴史を導き給う、父なる神の愛、
神への信頼ゆえに、明日を心配する思いから解放し給う、主イエス・キリストの恵み、
起こりうる事故に備えさせ、且つ委ねる信仰に生かし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。